

## 書 評

中島三千男著『海外神社跡地の景観変容—さまざまな<sup>いま</sup>現在—』

御茶の水書房 2013年 119p. 1,000円(税別)

「海外神社跡地の景観変容」とは、いかにも地理学的なタイトルである。著者は日本近現代思想史が専門というが、地理学の側からも魅力的に見える本である。以下、本書の内容を紹介し、拙評を述べたい。

本書の内容を簡単にまとめれば、戦前に建てられた海外神社の跡地を調査し、景観変容を四類型にまとめ、さらに景観変容の五つの要因を提示したものである。

第1章「海外神社とは」では、海外神社の概要説明が行なわれる。海外神社には大きく分けて二種類あり、本書で扱うのは、近代以降、日本の領土(植民地、台湾・樺太・朝鮮)や租借地(関東州)、委任統治領(南洋諸島)、「満州国」、日本の占領地(中国・東南アジア)等に建てられた狭義の海外神社であるとする。その数は、存在が確認されるものだけでも1,640社にのぼるといふ。また、海外居留民等が設置(奉斎)した神社群と、日本国政府や現地の日本統治組織によって建てられた神社群の二つがあるという。

第2章「海外神社跡地における神社の遺構・遺物の残存状況」では、著者が実際に現地調査した109の海外神社跡地の現況や遺構・遺物の残存状況などのデータが、表の形で提示される。神社の痕跡を確認できないのは、36社(約33%)にすぎないという。そして、社殿部分や遺構がよく残っている例をいくつか紹介している。

第3章「海外神社跡地の景観変容の四類型」では、現況の景観を「改変」「放置」「再建」「復活」の四つの類型に分ける。「改変」とは、跡地が改変されて、神社の遺構の一部が残っているか、まったく痕跡が見られないもので73例(67%)、「放置」は、未利用のまま放置され、遺構が残っているもので29例(27%)、「再建」は、1980年

代以降、神社が再建されたもので5例、「復活」は、海外神社が、もともとあった施設を利用している場合、それがもとの施設に戻ったもので2例である。「再建」と「復活」という後二者の類似の表現は、説明されないと違いが分からないので、漢字二文字にこだわらずに、それぞれ「神社再建」「元施設復活」とでも表現すればよかったのではなかろうか。類型に関する本質的なコメントは後述する。以下、「復活」「再建」「放置」「改変」の順に、それぞれの例が具体的に挙げられる。事例の多い「改変」は、公園、宗教関連施設、忠烈祠、銅像・記念碑・記念館等、文化財・歴史遺産等、教育施設、病院、軍施設などに細分されている。第2章もそうだが、随所に掲載されている写真が、景観の理解を容易にしてくれる。

第4章「海外神社跡地の景観変容の五つの要因」は、景観変容の要因として、「政治的要因」「社会の変容」「経済発展の度合い」「文化伝統」「支配交替の(刻印)」の五つを提示し、それぞれの内容について説明する。

最初の「政治的要因」とは、海外神社が建てられた地域の戦後の国家体制や日本との関係である。神社再建例がすべて親日意識の強い旧南洋群島の国(地域)の神社であり、社会主義国家や「歴史問題」を抱えている国では再建が不可能であることや、友好的な台湾に多くの遺構・遺物が残されていることを引き合いに出している。ただ、「政治的要因」とは国家レベルだけでなく、地方行政レベルのものもあるであろうし、下記の「社会の変容」にも政治が絡んでくる。著者が言わんとするのは、「国政レベルの背景」ということであろう。

次の「社会の変容」とは、当該国家・地域や日本における政治的・経済的な社会変容のこととい

う。具体的には、中国の文化大革命で社殿が破壊されたり（ただし、東北部ではかなり残ったという）、南洋群島における神社再建の背景に現地政府の日本人観光客誘致策や日本社会の変化があることが例として挙げられる。しかし、文化大革命や観光行政は「社会の変容」ではなく、これこそが「政治的要因」や背景であり、後者の例でも日本側の神社再建推進者の動きは「社会の変容」に含まれるものなのか疑問である。

三つめの「経済発展の度合い」とは、経済発展が遅れた地域に多くの神社遺構が残っているというところで、台湾東部の花蓮県や南洋群島、樺太、中国東北部が例に出される。また、時間的にも、戦後すぐにはイデオロギーより社殿の経済的価値が優先され、他のものに転用されたが、経済発展に伴って理念が問われ、建て直された例が示されている。これに関連して、都市部の平地に建てられた神社の遺構はほとんど残っていないと、（著者はこの用語を使っていないが）「立地」の問題を付け加えている。経済発展と関わりがあるという著者の指摘には納得できるものがあるが、しかし実は著者は、景観「変容」の「要因」ではなく、「残存」の「背景」を強調しているようにも見える。

四つめの「文化伝統」とは、当該国・地域の文化伝統の違いが景観変容の多様性と関連しているというところで、南洋群島のキリスト教文化や台湾の忠烈祠が例に挙げられている。ただし、これも景観変容の要因ではなく、新たな景観形成の背景であろう。

五つめの「支配交替の〈刻印〉」とは、神社跡地に教会や寺院、廟、忠烈祠、記念碑・記念館・銅像等が建てられるということである。鳥居などの付属物が残されたまま忠烈祠が建てられたり、跡地を公園化して国の英雄の銅像を建てる例を挙げている。これも、景観変容の要因ではなく、新たな景観構築上の一技法と言うべきであろう。最後に、上記の五点とは別に、経済発展がより進み、社会が成熟すると、社殿を建築文化財として位置づけ保存する動きがあることも紹介されている。

以上、要約してきたように、本書は、戦前に建てられた海外神社の跡地が現在どのようになっているのか、また変容の要因は何かをきれいに整理している（ように見える）。廃線跡や戦跡、城跡のように、かつて存在したものの痕跡が現場に残っている場合、その探索は一般の人にも人気がある。著者自身も東アジア・太平洋各地の100以上の海外神社跡地を訪れていることには感服するが、しかし、著者はそれを学問的レベルにまで引き上げ、景観変容やその要因を類型化しているのは見事である。

以下、本書全体に関わる評者のコメントを記していきたい。まず、書名や章題にも使われる「神社跡地の景観変容」という表現は、じっくり考えると違和感がある。「神社跡地」という表現からは、日本の敗戦とともに神社がすべて破却されたと感じさせられるが、実際はそうではなく、ある程度の年数、残っていた例も少なくないことが本書の記述からうかがえる。「神社跡地」という書名では、著者自身も持っていたという（20頁）上記のような誤ったイメージをかえって増幅させることになるのではなからうか。かといって、「神社の景観変容」では、神社の建物が、細部の変更を経ながら現存しているという印象を与える。「神社境内地の景観変容」くらいがベターの表現のように思われる。「跡地」の問題点をもうひとつ挙げると、神社が取り壊されて「跡地」になった段階で景観は変容しているのだが、「跡地の景観変容」ではそれを含まず、「跡地」になってから景観がどのように変化するかを指すことになる。しかし、「景観変容」の語には、中身のあるまとまった景観が最初に存在していることが含意されており、目ばしいもののない「跡地」をスタート時点とする「景観変容」は、しっくりしない表現である。「跡地」に新たな施設（景観）が造られることに重点を置くならば、「跡地の景観形成」と言うべきところだが、それは、神社の残存状況を詳しく調査する著者の意図に反するであろう。神社の建物がなくなって「跡地」になることを含めて景観の変化を見ようというのが趣旨であろう

から、「跡地」の表現はやはり適切ではないと考える。

次に、「改変」「放置」「再建」「復活」という景観変容の四類型は、人の手が加えられたかどうかという指標においては、「改変」と「放置」の二つに分類すべきものであろう。「再建」と「復活」は、人の手が加わったという点では「改変」と同じであり、「再建」は、「改変」の中に「再建神社」という細分類を作って入れ込むことができる。「復活」の2例も、復活したもとの施設の細分類に含められる。本書の記述では、わざわざ「復活」の類型を作ることの意義があまり感じられない。

景観変容の類型化については、論理的には別の整理も可能だと思われる。モノとしての景観にこだわるならば、大きく社殿の建物と付属物（鳥居・燈籠・手水鉢など）、神社境内地区画の三つのレベルに分けて、社殿建物と付属物の前二者は、残存、（基壇など一部残存）、滅失の二つまたは三つの景観変容に分類することができる。神社境内地区画のレベルは、明瞭、（一部不明瞭）、不明瞭に分類できる。次に、建物残存の場合（6例という）、付属物残存の場合、境内地区画明瞭の場合は、それぞれの現在の用途でグループ分けができよう。その用途の中には、本書の「放置」に該当する「不使用」も含まれる。

景観変容の五つの要因に対する個々のコメントは上に記したとおりだが、全体としては、次元の違うものが五つ列挙されているという印象を受ける。また、「要因」とは言えないものが多いように思われる。さらに、三つめの「経済発展の度合い」のように、景観「変容」の要因ではなく、部分的には景観「残存」の要因や背景を追求しているようにも感じられる。

ここでも景観変容の要因について、評者なりの整理を行ないたい。景観変容というものを根本的に考えてみると、ある景観構成要素の滅失と、新たな景観構成要素の付加から成る。海外神社の場合ならば、失われる構成要素とは、社殿やその付属物である。すべて失われて、新たな構成要素が

付け加わらなければ、更地のままである。景観変容の要因は、景観構成要素の滅失と付加それぞれについて考える必要がある。滅失の要因として容易に想像されるのは、植民地支配のシンボルである神社を破壊したい欲求であり、政治的・イデオロギー的要因とも言える。しかし、滅失の要因はそのような直接的なものだけではない。神社の土地に別の施設を造りたいので、邪魔になる既存の社殿やその付属物を破却するという間接的要因もある。都市部の平地の神社がほとんど残っていないというのは、このようなケースも多いであろう。新たな施設建設の要因は多岐にわたると思われ、一概に経済的要因などとまとめることはできない。その他、放置されて荒廃するのも別の消極的要因である。

以上の議論を価値観という視点でとらえ直すと、既存の社殿やその付属物に負の価値や意味を見出せば、早期に破却される（景観の変容）。正負の価値観がなければ放置されるか、有用な部材が持ち去られる（景観の残存から荒廃へ）。逆に、建物や文化財として正の価値を見出せば、転用や保存が行なわれる（景観の残存）。正負両方の価値観があれば、両者を比較して、大きいほうに決定する。そして、正の価値観がまさって（あるいは正負の価値観がなくて）神社が残存している土地に別の施設を造ろうという場合、その施設の価値と神社の価値とを比べて、新たな施設の価値が大きいと判断されれば、神社が破却され、新施設が建てられる（景観の変容）。以上のような枠組みに個々の神社を位置づければ、景観の変容だけでなく、残存も含めて説明できるのではなかろうか。

なお、南洋群島における神社の再建は、この枠に入れにくいのが、それは、神社滅失（景観変容）後の再変容だからである。また、価値観の主体に、現地住民だけでなく、日本人が絡んでくるのも特異である。南洋群島の海外神社は、このような特殊性に留意して、他の神社と比較すべきであろう。

本書に欠けているのは、敗戦時と現在（著者が

調査した1990年代以降)の間、約50~60年間の変容プロセスである。神社の建物がいつ頃どのように失われ、いつ頃どのような経緯で新しい施設が建てられたのか、滅失・新設の意思決定者や土地の所有・管理者は誰だったのかといったことは、一部の神社の情報が提示されているのみである(たとえば97~98頁)。数多くの海外神社について、このような調査を独力で行なうのは困難であることは承知しているが、景観変容をきちんと検討するには、変容プロセスの実態を明らかにしておくことが必須である。敗戦時と現在という二つの「時の断面」の比較だけでは、皮相な議論にとどまるであろう。

最後に、海外神社跡地の研究は、最終的には何を目指すのであろうか。もちろん、著者は本書の最後で、「海外神社跡地の景観の変容は(中略)当該国・地域の様々な「現在」を映し出すもの

であり、海外神社跡地の研究は「過去(戦前)の事実を知る(中略)」ということに止まらず、何よりも、その国、その地域の「現在」を知る、「現在」を見ることになる」(111頁)と強調する。そのことは、「さまざまな現在」という本書の副題にも表れている。また、本書冒頭でも、研究の意味として、「その地域と戦後日本との関係」、あるいは「その地域の(中略)歴史や政治・経済・文化の問題」(12~13頁)を読み解けると記す。しかし、それら関係史・戦後史・現代史の中身や見通しは曖昧であり、もう少し具体的に述べていただきたかったと思う。

ここまで駄弁をろうして、ひるがえってみれば、「海外神社境内地の景観変容」という地理的現象は、地理学者こそ、その研究に取り組みねばならないのではないかとの思いに至る。最後に自省の念を抱き、拙評を終えたい。

(小田匡保：駒澤大学)